

## —仲間とともにつながる学校へ—

## 情報過多の現代社会を生き抜くために（石小の実践より）

ICT活用が目標ではない。情報を活用して自ら考え、表現する力を育むことをめざす。

現代は、興味のある情報ばかりに触れる「フィルターバブル現象」や、AIによる情報収集・要約が当たり前になった時代。本来の情報を見ずに口コミに依存してしまう傾向も強い。

このような状況で、子どもたちの情報活用能力をどう育むかが大きな課題。

現在、「言語能力」と「情報活用能力」がともに不十分だという現状が認識されている。そこで、この2つを「両輪」として捉え直し、各教科の「探究的な学び」で実践的に活用することが重要。

## 石橋小の研究と実践

「情報の時間」の設定：全学年で「情報の時間」…情報活用能力の基礎基本を系統的に学ぶ時間。基礎練習（情報の時間）と実践（各教科の探究的な学び）を「行ったり来たり」往還するサイクルをめざす。

## 具体的な取り組み

- ・ 比べる、分類する：身近な先生や宝物を題材に、思考の技を学ぶ。
- ・ 理由付ける：「宿題は必要か」といったテーマで、根拠に基づいた主張を行う練習。
- ・ ビブリオバトル（6年生）：紹介したい本の魅力を自分の言葉で語り、主人公と自身の経験を重ね合わせることで、思考を整理して伝える力を育てる。

## 発達段階に応じた指導：

低学年（1・2年生）：「比べる」「分類する」など基本的な技を、生活経験と関連付けて学ぶ。

中学年（3・4年生）：「多面的に見る」「理由付ける」といった高度な思考方法を、教科学習と結びつけて学ぶ。

高学年（5・6年生）：学習の目的に応じて考え方を選択し活用する力を養う。1学期にはディベート大会を実施し、意見の整理や根拠の提示を実践した。

大阪府SE事業で情報活用能力をはぐくむモデル校の石橋小学校の研究会（9/11）に参加してきました。全体会（講師：放送大学客員准教授塩谷京子先生）の内容を共有します。学びを支える土台となる力のひとつ、情報活用能力についてのお話です。

## 情報活用能力と他教科の連携

情報活用能力の育成は、言語能力と密接に関わっている。

## 言語能力：

思考の土台となる「語彙」の確実な習得が必須。教師が「観点」「仕組み」「原因」「対策」といった言葉を日常的に使うことで、子どもたちに「言葉のシャワー」を浴びせることが重要。

## 情報活用能力：

各教科が「痛み分け」して担っている。特に国語科は「情報と情報の関係」「情報の整理」という重要な役割を担う。算数・数学でデータを読み取っても、それらに関係付けて自分の考えを作るのは国語科の指導範囲。

## 「整理」から「分析」へ

情報過多の現代では、単に情報を「整理」するだけでなく、「分析」する能力が不可欠。

**情報の整理：**思考ツール（ベン図、マトリクス表など）を段階的に活用し、情報を客観的に整理する力を養う。

**情報の分析：**情報と情報を関係付けて意見を形成する。主張（意見）に対し、具体的な理由と客観的な事実（データなど）をピラミッドチャートのように構造化して示す練習を。6年生の授業では、「金閣と銀閣、どちらが好きか」という問いに対し、単なる感想ではなく、根拠をもって意見を導き出す実践が行われた。

## 今後の展望

教員全体で情報活用能力育成への意識を高め、各教科との連携を強化していくことが必要。

「情報収集のツール」は増えても、「自分の考え」はツールが作ってはくれない。どう情報を関係付けて自分の意見を持つか、その力を子どもたちに身につけさせることを研究の視点に置く。教員が指導の全体像を把握できるよう、府の「情報活用能力ステップシート」の活用も推進。



※こちらの図は  
桃山学院大学木村明憲教授の研修資料より引用



大阪府  
情報活用能力ステップシート